

# 『水経注』に基づく漢唐間の 昆明池水利システムの復原

黄 学 超  
吉 田 愛 訳

昆明池は、漢から唐の間、長安城の西にあった重要な貯水池で、その規模の大きさ、用途の多様さ、継続して利用された時間の長さ、水利システムの複雑さは、これまでも学界で注目されてきた<sup>[1]</sup>。先行研究は豊富にあるが、千年も続いた水利システムを専門的に取り上げ、体系的かつ詳細に考察したものはまだない。そこで、浅学の身ではあるが、『水経注』の記載を手掛かりとして、昆明池水系の水路をつぶさに検討したうえで、その水利システムの形成と継承の変遷過程を考察してみたい。

## I. 『水経注』に見える昆明池水系の復原

北魏に編纂された『水経注』は、昆明池とその周辺の水系に関する詳細な記述があり、信頼性の高い貴重な資料である。『水経注』の文章を、今日目にする地理的状況や考古資料と照合すると、当時のほぼ正確な水系の様相を復原でき、かなり精密な水系図を描き出すことが可能となる。既にこうした仕事に着手した研究者はいるが<sup>[2]</sup>、不十分なところがあるため、本稿では改めて考証して修正を試みたい。

昆明池の水系は、渭水とその南岸の支流である豊水（澧水）・滈水（鄯水・鎬水）・沔水（滈水）を含み<sup>[3]</sup>、『水経注』では主に渭水篇にこれらに関する記述が見られるが、既に散逸した豊水篇にも大変重要な記述が残っている。以下、『水経注』に記された水路に関連する文章を抜粋して引用し<sup>[4]</sup>、それに従って考察を進めたい。昆明池水系の中核は豊水と沔水の間にあるため、本稿ではこの地域の水系の復原に重点を置く。なお、沔水以東の水路や支流には昆明池を源とするものもあるが、昆明池から距離が遠く、流路も比較的単純かつ明確なので、その水路の検討は昆明池の水利システムを明らかにする上で得られるものは少ない。ゆえに、その形態について簡単に述べるに留め、流路の復原は省略する。

表 1 滌池・瀉池の位置に関する諸学説

研究者	滌池	瀉池
王森文 <sup>[6]</sup>	西山寺前の聖女泉	豊鎬村北の高陽原の西
陳子怡 <sup>[7]</sup>	(なし)	昆明池内の北部
黄盛璋 <sup>[8]</sup>	西山寺	豊鎬村西北の「小昆明池」の窪地
胡謙盈 <sup>[9]</sup>	豊鎬村一洛(落)水村間の「小昆明池」の窪地	幹龍嶺—北常家荘間の昆明池遺址の北半分
陳直 <sup>[10]</sup>	豊鎬村西北の洛(落)水西村	昆明池北の「小昆明池」
徐錫台 <sup>[11]</sup>	蘇村の北	「小昆明池」の窪地
盧連成 <sup>[12]</sup>	豊鎬村西北—落水村間の「小昆明池」の窪地	幹龍嶺—北常家荘間の昆明池遺址の北半分

『水経』渭水篇の「又東，豊水従南来注之」に付された酈道元の注には、「『地説』云，渭水又東与豊水会于短陰山内，水会無他高山異巒，所有惟原阜石激而已。」とある。豊水にはこれとは別に専篇があったため、酈道元はここでは簡単に、豊水が渭水に注ぐ合流点に関する『地説』の記載を引用して述べるに留めている。しかし、これは酈道元が『地説』の説に賛同を示しているとも言え、『水経注』の時代の豊水・渭水の合流点もほぼ同様であったに違いない。当時の豊水は、現在の客省荘から西北に曲がり、現在は既に干上がった沙河の河道に沿って渭水に流れ込んだ。この点についてはこれまでの研究者たちも認めており、ほぼ確実と言える。

酈注はまた、「渭水又東北与瀉水合，水上承瀉池于昆明池北，周武王之所都也。……水又北流，西北注，与滌池合。水出瀉池西，而北流入于瀉。……瀉水北逕清冷台西，又逕磁石門西。……瀉水又北，注于渭。渭水北有杜郵亭，去咸陽十七里，今名孝里亭，中有白起祠。」と記す。ここで触れられている瀉池と滌池の所在に関する先行研究をまとめたが（表 1 参照）<sup>[5]</sup>，考察した上で修正する必要がある。

2006年に、中国社会科学院考古研究所漢長安城工作隊による「西安市漢唐昆明池遺址的鉆探与試掘簡報」（以下、『簡報』）が発表された。その中で昆明池と北側の2つの池の跡の範囲を詳細に描き出し、この2つの池をそれぞれ瀉池と滌池に当てはめていた<sup>[13]</sup>。『簡報』によると、この2つの池の跡は、1つは豊鎬村—落水村の間にある幹龍嶺の北、もう1つは現在の豊鎬村—紀陽寨—躍進村—桃園村—落水村の間（すなわち、表中の「小昆明池」の窪地）にあり、幹龍嶺の北にある池の水が北流して「小昆明池」に入り、さらに北へ流れて旧河道を通り、渭水へ流れ込んでいたという。しかしながら、『水経注』の文章を子細に読めばわかるように、当時、昆明池の北に位置していた瀉池は、瀉水を通じて北流して渭水に入り、また瀉水は西北へ流れて滌池と合流するとある。つまり、滌池は瀉池と瀉水の西側にあり、また水源も別で、滌池の水は下流で瀉水に入るはずなのである。もし『簡報』の結論に

よるならば、滌池は瀉池の北にあって、瀉池の水を全て受け入れることになるが、これは文献の記載と合わない。しかも、前掲の諸説は、2つの池の相対的な位置と水流の関係については、どれも『水経注』の記載と厳密には一致しない。

実のところ『簡報』は、南朝の梁に書かれた『廟記』に、瀉池は「周匝二十二里」という記述があることに着目したが<sup>[14]</sup>、これでは確定した瀉池の外周との差が大きいため、『廟記』の記述は「2つの池はもともと連なっていたため、実際には鎬池と彪池を合わせた外周である」としている。しかし、『廟記』の記す瀉池の外周がこの2つの池が相繋がったもので、かつ昆明池の北にちょうど位置する古池の跡とも一致するならば、この2つの古池の跡は1つの池であったと見なすべきで、瀉池と対応するものと考えられる。「小昆明池」の窪地の形状は細長く、そのうえ、北魏時代の池はさらに狭まり、水が窪地いっぱいには広がっていなかったと考えられるため<sup>[15]</sup>、『水経注』ではそれを瀉池の一部とは見なさず、「瀉水」としたのではなかろうか。このように、「小昆明池」の窪地は西北に折れ曲がる地勢で、『水経注』に見える、瀉水は「西北注」との記述とまさに一致する。

それでは、滌池はどこにあったのだろうか。『水経注』では、滌池は直接瀉水に流れ込むと記すが、滌池から流れ出す「滌水」には特段触れていないことから、滌池が東北—西南方向に延びた細長い形状で、それ自体が河流のような形態を備えていたとわかる。先行研究によると、現在の馬王街道の豊水の東側に、斗門鎮の西—花園村の西—普渡村の西—下泉北村の西—南田村—北田村—大蘇村というラインに沿って現在の三橋一帯まで至る、東北へ向かう1本の旧河道があった。これは商周時代の豊水の旧河道で、「小昆明池」の水は現在の北田村付近で豊水の旧河道へと注ぎ込んでいた<sup>[16]</sup>。これは、『簡報』の「彪池の北端は1本の旧河道と相接していた」という記述と合致する。すなわち、前述の瀉水は西北に曲がって流れた後、東北へ流れる豊水の旧河道と合流するということになる。もし、滌池がこの旧河道上にあったならば、『水経注』の記事と符合する。この豊水の旧河道は幅が500～700メートルあり<sup>[17]</sup>、東側の「小昆明池」より広く、細長い形状の貯水池であった可能性も十分にあり得る。『詩経』小雅、白華の「滌池北流，浸彼稻田」という句に、毛伝の「滌，流貌」という注釈がある。これは、滌池が東北へ流れる豊水の旧河道上に位置し、河流の形態を呈していた証左となろう。

『水経注』の記載によると、滌池の水源は現在の上泉村一帯にあった。上泉村の名が湧き水にちなんで付けられたものとするれば、滌池はその湧き水を源としていたはずである。また、豊水の旧河道に流れていた瀉水とは、おそらくは旧瀉水が豊水に注いでいた合流点である豊水上流の旧河道に集まった水の一部が流れ出したもので、これも滌池の構成要素と考えて差し支えなかろう。宋代の宋敏求の『長安志』には、「雁鶩陂。『廟記』曰、「在瀉池北。地方

六頃、承昆明池下流。』と書かれている<sup>[18]</sup>。この雁鵞陂は『水経注』には記されていないが、その地理的位置から考えて、滌池の別称である可能性はかなり高い<sup>[19]</sup>。とすれば、池は6頃の広さしかなかったということになる。

瀉水は滌池と合流した後、北に流れて清冷台と磁石門の西を過ぎる。清代の王森文は、長安城の西にあった好漢台について、「有小碣，云即秦阿房宮磁石門。台有三中断処，或即門洞古跡，而二欠，又疑非制<sup>[20]</sup>。」と考察し、これに基づき、彼は磁石門を好漢台（現在は好漢廟）のあった双楼村に比定している<sup>[21]</sup>。『元和郡県図志』京兆府咸陽県に、「秦慈石門，在県東南十五里。東南有閣道，即阿房宮之北門也<sup>[22]</sup>。」とあるように、方位・距離とも一致し、好漢廟も確かに秦の阿房宮前殿遺址の真北にある。考古資料によると、好漢廟遺址はまさしく「戦国末期から前漢にかけての建築基壇<sup>[23]</sup>」であるという。時代・形状・地理的位置・実物証拠（小碣）を総合すると、好漢廟遺址を秦の磁石門に当てはめることに問題はなからう<sup>[24]</sup>。一方、清冷台の所在については確実な考証はできないが、好漢廟の南にある後園寨村の北には戦国時代から前漢にかけての高台建築遺址があり、「安台居室」の文字が残る陶製の筒瓦が出土したことから<sup>[25]</sup>、ここが清冷台の旧跡である可能性は極めて高い。このように、瀉水が滌池と合流した後、豊水の旧河道に沿って現在の蘇村付近まで北流し、その後は現在の漆渠河の河道に従って北流して渭水に入れば、清冷台・磁石門の西を順に過ぎることができる。

酈注はまた、「渭水又東北逕渭城南……南有沔水注之。水上承皇子陂于樊川……其水西北流逕杜県之杜京西，西北流逕杜伯冢南。……沔水又西北逕下杜城，即杜伯国也。沔水又西北枝合故渠，渠有二流，上承交水，合于高陽原，而北逕河池陂東，而北注沔水。沔水又北与昆明故池会，又北逕秦通六基東，又北逕塢水陂東，又北得陂水，水上承其陂。東北流入于沔水。沔水又北逕長安城西，与昆明池水合。水上承池于昆明台……池水北逕鄠京東，秦阿房宮西。……其水又屈而逕其北，東北流注塢水陂。陂水北出，逕漢武帝建章宮東，于鳳闕南，東注沔水。沔水又北逕鳳闕東。……沔水又北，分為二水，一水東北流，一水北逕神明台東。……沔水又逕漸台東。……沔水又北流注渭，亦謂是水為瀉水也。」と記している。この段落は沔水に関する記述で、その近辺を流れる漢代の故渠と昆明池を源とする2つの水路にも触れている。昆明池の東側の水系を記す最も詳細な資料であり、極めて重要である。

沔水の水源である皇子陂は、現在の西安市長安区皇子坡村付近に位置していたと考えられ、現在の皂河もここを水源としているが、貯水池の痕跡はもはや見ることができない。杜京とはおそらく「杜原」の誤りで、現在の少陵原のことであろう。また、下杜城は現在の長安区杜城村であることから、沔水は水源から現在の皂河の河道を西北に流れていたとわかる。その後、沔水は故渠と合流する。故渠の所在については後述する。「昆明故池」とは「昆明故

渠」のことで<sup>[26]</sup>、昆明池の流出水路であるが、この流路についても後文を参照されたい。「秦通六基」については意味が通らず、これまで触れられてこなかった。思うに、「六基」の字形は「天台(基)」と似通っているので、ここはあるいは「秦通天台」とするべきではなかろうか。とすれば、現在の西安市未央区阿房宮村の南にある、「秦始皇上天台」と伝えられる戦国から秦代にかけての高台遺址がちょうどこれと対応する<sup>[27]</sup>。つまり、沔水はこの遺跡の東を通り、現在の皂河付近を流れていたのである。

沔水は北に流れ、塢水陂の東を過ぎる。この貯水池は昆明池水を受け入れ、二手(塢水陂水・昆明池水)に分かれて沔水に注ぐ。塢水陂は地理的位置からすると、秦の阿房宮前殿遺址と漢の建章宮遺址の間にあり、皂河の西側にあたる。調査によると、この範囲にある藺高村の南には広い面積に及ぶ湖底堆積物があり<sup>[28]</sup>、こここそが塢水陂のあった場所と考えられる。この塢水陂は沔水から離れていないため、沔水に最初に流れ込む塢水陂水の水路は短く、その合流点はおおよそ藺高村の東南にあったと見られる。沔水は塢水陂水を受け入れて、さらに北流する。また、昆明池水は昆明池から東北に流れ出るが、『簡報』には、昆明池の東北岸には2本の流出水路があり、ほどなくして合流すると明示されているので<sup>[29]</sup>、沔水は昆明池水の水源と言えよう。鄠京とは周の都が置かれた鎬京の遺址で、その中心地区は現在の斗門街道から落水村にかけての一带にあったと主に考えられており、昆明池水はその東を過ぎる。阿房宮とは阿房宮前殿を指し、現在もその遺址は残っている。昆明池水はその西を過ぎ、また東に曲がって、その北を過ぎ、ちょうど「上天台」遺址の北で塢水陂に流れ込む。塢水陂から流れ出る第2の水路は、昆明池水が塢水陂に注ぐ合流点と近接し、また水の流れる方向が同じであるために、「昆明池水」の名を受けることになった。この水路は北流して建章宮の東を通る。建章宮の東南角がやや内側にすぼまるのは<sup>[30]</sup>、水流の影響を受けたためと考えられる。鳳闕は現在の北双鳳村・南双鳳村にある。その遺跡は現在も残っており、東は皂河に接している。皂河の東は、すなわち漢長安城の西壁にあたる。以上のことから、沔水と昆明池水は漢長安城の西南でしばらく平行に北流して、双鳳村の南で合流することがわかる。その後、沔水は北流し、支流は東へ流れ(支流は二手に分流した後、それぞれ藕池と北の渭水へ流れ込むが、本稿の内容に直接関わるものではないため、詳しくは論じない)、本流は西へ「曲がって建章宮区内に入り、漸台の東を経て太液池に合流し、また北へ流れ出て渭城の南で渭水に注ぐ<sup>[31]</sup>」。

酈注にはまた、「渭水東合昆明故渠，渠上承昆明池東口，東逕河池陂北，亦曰女觀陂。又東合沔水，亦曰漕渠，又東逕長安城南，東逕明堂南。……故渠又東而北屈逕青門外，与沔水枝渠会，渠上承沔水于章門西，飛渠引水入城，東為倉池，池在未央宮西，池中有漸台。……又東逕未央宮北……又東逕武庫北……明渠又東逕漢高祖長樂宮北……故渠又東出城分為二渠，

即漢書所謂王渠者也……一水逕楊橋下，即青門橋也，側城北逕鄧艾祠西，而北注渭，今無水。其一水右入昆明故渠，東逕奉明渠而東入霸，一水北合渭。今無水。」とも記されている。この昆明故渠とは、前述した沔水と合流する水路のことであるが、この酈注から、昆明故渠が実は沔水を横断して東に流れ、漕渠の上流となったことがわかる。

『水経注』は昆明故渠（漕渠）の水源は昆明池の東側にあると記しているが、『簡報』の調査で明らかにされた流出水路に、この故渠と対応するものはなかった<sup>[32]</sup>。『簡報』にはまた、昆明池の東岸には2本の連結した流入水路があるが、東南方向に向いており、水路の方向から言えばこの昆明故渠と対応するようだが、水流の方向は『水経注』の記載と異なると書かれている。酈道元が注を付す際、地図に依拠することが多かったと考えられるが、地図では水路の方向を示すことはできても、水流の方向は明確に表せないため、水流の向きを誤って記す可能性も存在する。とすれば、この2本の流入水路を昆明故渠と見なす試みは妥当と言えよう。酈注に見える河池陂は現在の河池寨付近に位置する<sup>[33]</sup>。この2本の水路は水流の向きからすると、河池陂に繋がっていたのは確実である。『太平寰宇記』雍州長安県には、「河池陂，亦承昆明池而東注渭<sup>[34]</sup>。」とあるが、河池陂の地勢は昆明池よりかなり高いため、昆明池水が東流して河池陂に注ぐことは不可能であり、『太平寰宇記』のこの記述は誤りである。しかし、河池陂が昆明池と渭水を繋ぐという記述にはおそらく間違いはなかろう。河池陂という名もこれを裏付けており（漕渠が下流で河水に通じたと考えられる）、河池陂には西に流れて昆明池に通じる水路と北に流れて漕渠に通じる水路があったと考えられる。また、『水経注』には昆明故渠は「逕河池陂北」と記載されている。むしろ昆明故渠は東に流れ、河池陂の北は通っても河池陂には入らないと解釈することはできるが、もし「河池陂」の後に句読点を置かならば、「河池陂を經由して北流する」との解釈も可能である。宋敏求の『長安志』長安県「河池陂」条には、「『水経注』曰、「昆明故渠，上承昆明池，而東逕河池陂而北，亦曰女観陂。」と記されている<sup>[35]</sup>。ここに引用された『水経注』は通行本の酈注とはやや異なり、「逕（逕）河池陂北」の間に「而」が一字多く入り、その文意は「河池陂を經由して北流する」という解釈の説得力をさらに高める。このように、河池陂から昆明池に通じる水路を河池陂から漕渠に入る水路と繋げると、『水経注』の昆明故渠のコースの特徴とまさしく一致し、これは妥当な解釈と言えよう。酈道元は2本の水路を1つのものと見なして昆明池を水源とすると注を付したが、地図の誤読によって生じた誤りと考えられる。

昆明故渠は沔水を横断し、東に流れて北に曲がり、沔水から分流して長安城を貫く明渠と長安城の東で合流する。明渠との合流点でまた2つに分かれ、1つは長安城に沿って北流して渭水に入り、もう1つは東流してさらに2つに分かれ、東に流れる水路は霸水に入って、

その下流は漕渠となり、北に流れる水路は渭水に注ぐ。

『水経注』の豊水篇は既に散逸したが、幸いなことに、宋敏求の『長安志』にその佚文が5つ残されていた<sup>[36]</sup>。『長安志』宮室、周に、「豊水北経霊台西，文王又引水為辟雍，靈沼<sup>[37]</sup>」。万年県，福水条に，「『水経注』曰，「上承樊川御宿諸水，出県南山石壁谷，南三十里与直谷水合，亦日子午谷水。」<sup>[38]</sup>」，長安県，豊水条に，「『水経注』曰，「豊水出豊溪，西北流分為二水。一水東北流為支津，一水西北流，又北，交水自東入焉。又北，昆明池水注之。又北，経霊台西，又北，至石墩，注于渭。」<sup>[39]</sup>」，交水条に，「『水経注』曰，「交水又西南流，与豊水支津合。其北又有漢故渠出焉。又西至石塢，分為二水。一水西流注豊，一水自石塢北経細柳諸原，北流入昆明池。」<sup>[40]</sup>」，石闔堰条に，「『水経注』曰，「交水西至石塢，漢武帝元狩三年穿昆明池所造。」<sup>[41]</sup>」とあるが、福水とは交水のことで、豊水の支流であり、上掲の3つの佚文の内容を大掴みして繋げると以下ようになる。「豊水出豊溪，西北流分為二水。一水東北流為支津，一水西北流，又北，交水自東入焉。〔水〕上承樊川御宿諸水，出県南山石壁谷，南三十里与直谷水合，亦日子午谷水。交水又西南流，与豊水支津合。其北又有漢故渠出焉。又西至石塢，分為二水。一水西流注豊，一水自石塢北経細柳諸原，北流入昆明池。〔豊水〕又北，昆明池水注之。又北，経霊台西，又北，至石墩，注于渭。」

酈注の示す豊水は現在の澧峪河—澧河，交水は現在の交河と考えて問題はあまい。樊川の名は現在も使われており，瀉河はそこに流れている。御宿川は現在の王曲川で<sup>[42]</sup>，瀉河はそこに流れている。石壁谷は現在の石砭峪で，子午谷の名は現在も残っており，谷水は全て瀉河の上流となる。現在の瀉河は神禾原の北原を迂回して東南に曲がって流れ，香積寺で瀉河と合流し，交河と名を変え西流する。これは『水経注』に記される内容と完全に一致する。豊水の上流および交水の一部で最も検討に値するのは，豊水支流・漢故渠・石塢の所在の3つである。酈注によって，分流した豊水の東北へ流れる支流は交水に入ることがわかっている。つまり，豊水支流は，現在の交河の南側かつ豊水本流の東岸になくなくてはならない。胡謙盈を初めとする研究者は，豊水下流の東へ流れる旧河道を「豊水支流」と考えたが<sup>[43]</sup>，明らかに見当違いである。史念海は豊水支流の方位を正確に把握し，豊水支流と「交水の合流点は現在の香積寺の西南で，交水には西北に曲がって流れる場所はない<sup>[44]</sup>」と考えたが，まだ漠然とした印象はぬぐえない。趙双檜は，豊水支流の位置を正確に推定し，それは後世の豊水渠・賀蘭渠のことであると主張したが，蓋し至論である<sup>[45]</sup>。この渠は清代まで残り，三官渠と呼ばれた。三官渠は3つの水路に分かれ，そのうち東の水路は豊水が山の麓（現在の澧峪口）に流れ出る場所から北に出て，東北へ流れ，現在の金沙河に注いでから交水に流れ込む<sup>[46]</sup>。このルートこそ豊水支流のものと考えると差し支えあまい。漢故渠とは，先に引用した渭水篇の，「渠有二流，上承交水，合于高陽原，而北逕河池陂東，而北注沔水」に

見える故渠の1つである。漢故渠の取水口は豊水支流が交水に注ぐ合流点の北岸にあり、東北に流れて高陽原で別の交水故渠と合流する。高陽原は、現在の西安西南部の滹河北岸にある郭杜一帯に位置し<sup>[47]</sup>、隋唐期の永安渠は現在の香積寺付近から交水を引き、西北の楊源坊に至り、東北に折れて第五橋を過ぎ、沈家橋付近で沔水と合流する<sup>[48]</sup>。地形から考えて、もう一方の交水故渠はほぼ永安渠と重なるため、永安渠の前身と考えられ、その流路も似通っていたはずである。以上から、交水の北側にある2つの故渠の流路の概観を把握することができた。ただ一点補足するならば、この2つの水路が合流した後、西北に流れて河池陂に注ぎ込む水路があるということである。先の考察から河池陂には2つの流出水路があることがわかったが、陂の水がどこからもたらされたものかは不明であった。しかし、地勢から考えて、河池陂の水源はその東および南側を流れてきたこの2つの水路としか想定できない。唐代に河池陂の近くにあった定昆池は永安渠を水源としており<sup>[49]</sup>、河池陂の水源を検討する際の参考にもなろう。酈道元が注を付した際に未見だったためか、『水経注』が散佚したためか、現行本の『水経注』にはこの水路に関する記述はない。石塢の所在については、昆明池の取水地点と関わるため、既に多くの先行研究がある。この石塢とは『長安志』の記す「石闔堰」のことでほぼ間違いない。王森文と黄盛璋は実地調査を行い、石闔堰は現在の堰頭村にあり、交水は堰から北へ出て石匣口で昆明池に注ぐと論じたが、その信憑性は高い<sup>[50]</sup>。豊水は交水を取り込んだ後、北流してさらに昆明池水を受け入れる。豊水が昆明池の放水先の1つであったことは明らかである。『簡報』によると、昆明池西岸の現在の堰下張村から馬營寨村にかけて、西北方向に流れる1本の流出水路があるという<sup>[51]</sup>。水流の方向を見ると、この水路は必ず豊水に繋がるため、「昆明池水」と考えて差し支えあるまい。霊台の正確な位置は不明だが、おそらく昆明池の西北にある鎬京遺址の中であろう。石墩とはすなわち渭水注にある「石激」のことで、2つの注積が記す豊水が渭水に注ぐ合流点は一致していると見るべきである。

以上が『水経注』の示す昆明池水系について復原したものであり、これに基づき、『水経注』の時代の昆明池水系図を描き出すことができる（図1）。

北魏時代には太武帝が「発長安五千人浚昆明池<sup>[52]</sup>」を行い、北魏・西魏・北周の諸帝が昆明池で行楽した記録も散見される<sup>[53]</sup>。『水経注』の時代には、昆明池水利システムがひとまず安定したものと認められる。当時、樊川・御宿川の水の大部分は合流して交水となり、西で豊水の一部を取り込み、北流して昆明池に注いでいた。樊川の水の一部は皇子陂に流れ込んで沔水の水源となり、皇子陂自体は西と北へ流れる水の量を調節する役割を持った。交水の北側にある2つの漢故渠は既に「故渠」と呼ばれていたため、たとえ水がまだ流れていたとしても、おそらく大きな役割を果たすことはできなかったであろう。交水の石塢は分流



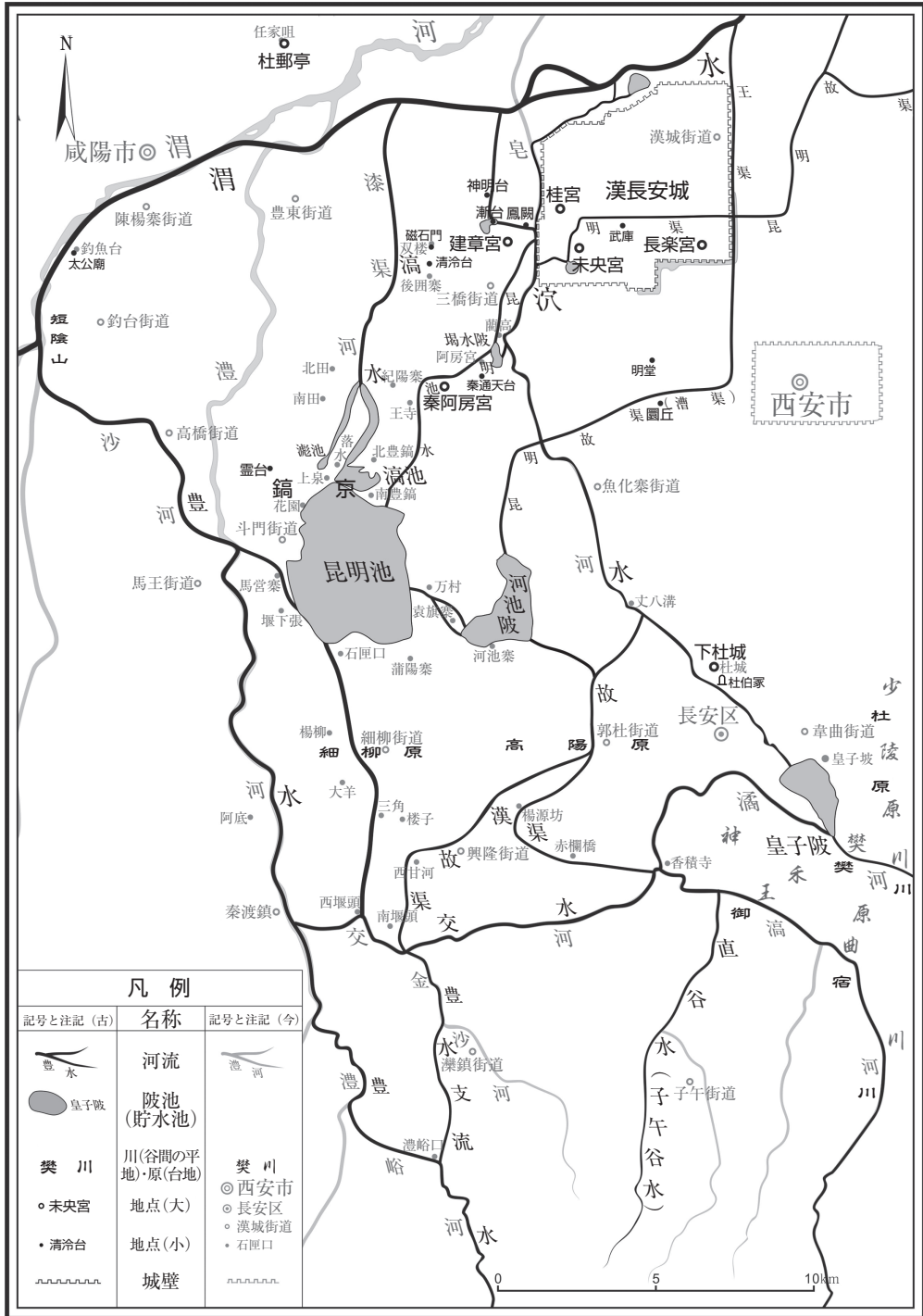


図1 『水経注』の示す昆明池水系

点にあり、その西側にあった交水が豊水に入る水路によって、昆明池に注ぐ流量を調節することができた。昆明池の主な取水口はちょうど現在の石匣口付近にあった。『簡報』には「石匣口村から蒲陽村にかけてのラインに沿って昆明池南岸を繰り返しボーリング調査したが、いかなる水路の痕跡も発見できなかった」と解説されてはいるが、もしこれだけに基づいて池の南岸には取水口がなかったと考えると、文献の記載と一致せず、明らかに矛盾する。『簡報』が池の南岸の水路の痕跡をまだ掘り当てていないのは、遺漏の可能性も排除できないが、取水口が自然流路（瀉水の旧河道、後文参照）に少し手を加えたもので、完全な人工水路ではなかったという理由によるとも考えられる。この他、昆明池の東岸にも取水口があり、河池陂から水を取り込み、主に河池陂の水量を調節する役割を果たした。翻って、昆明池の放水口は3ヶ所あった。池の西にあった放水口は、水を豊水へ導く。これはただ単に水量を調節するためのものであろう。池の北にあった放水口では、瀉池に注ぎ込んだ後すぐに瀉水を通して渭水へ入る。瀉池は昆明池に付属するダムと見なすことができ、北へ流れ出る水流を調節できた。池の東北にあった放水口では、水は塌水陂を経て沔水に入り、漢の長安城を通った。北魏時代の長安とは漢の長安故城のことで、雍州の州治が置かれた。そのうえ、この長安城は少し前には後秦の、また時を置かずして西魏・北周の都城となり、依然として重要な地位を占めていたため、この水路は主に長安城への水供給のために機能していた。中でも塌水陂は、水量が多ければ塞き止め、少なければ放流して、その量をコントロールする中枢的な役割を担った。先にも述べたとおり、その塌水陂の南側には、考古資料となる湖底堆積物が今なお相連なって残っている<sup>[54]</sup>。これは、塌水陂の貯水可能な面積が、酈注の記述より遙かに大きかったことを示している。酈道元が見たのは、塌水陂の貯水面積が比較的小さかった時の状況だけであったに違いない。以上から、北魏時代にも、既に構築して数百年を経ていた昆明池水利システムが概ね完備された状態で残っており、多様な働きをしていたことが明らかになった。

## II. 昆明池水利システムの形成と初期の改修

前章での復原を通じて、『水経注』の時代の昆明池水利システムに関する全体像を把握することができた。これを踏まえれば、昆明池水利システムの形成と初期の改修に遡ることも可能となる。

豊水は関中を流れる大河で、先秦時代の典籍である『詩経』（大雅、文王有声）・『尚書』（禹貢）にも既に記録があり、商周時代の自然流路は、現在の馬王鎮より上流については現在の豊峪河—豊河と同じで、馬王鎮より下流は東北へ曲がり、斗門鎮の西—花園村の西—普

渡村の西—下泉北村の西—南田村—北田村—大蘇村のラインに沿って流れ、おおよそ現在の三橋一帯で澇水と合流して渭水に注いだ<sup>[55]</sup>。澇水は、漢の司馬相如が詠んだ『上林賦』の「酈鄠潦澇，紆余委蛇，經營乎其内」の一文に初めて登場する<sup>[56]</sup>。先秦時代の河道は、現在の香積寺より上流については現在の石碇峪河—澇河と同じで、香積寺より下流は西北に流れ出て、現在の赤蘭橋—南雷村—堰渡村—東甘（干）河—西甘（干）河—樓子村—三角村—大羊村—孫家灣—楊柳村のラインに沿って流れ、現在の石匣口一帯でまた北流して澧水に注いだ<sup>[57]</sup>。澇水の下流は西周の鎬京の近くを流れ、その流路は周代には既に人の手が増えられた痕跡が残っている<sup>[58]</sup>。澇水（沔水）も上掲の『上林賦』が初出で、商周時代の自然流路は、現在の魚化寨より上流についてはおおよそ現在の大峪河—澇河—皂河と一致し、魚化寨以西では概ね現在の皂河の河道よりも西寄り、秦の阿房宮前殿遺址を経て、蘇村付近で澧水に注ぎ込んだ<sup>[59]</sup>。

秦代の阿房宮造営によって、もともとその地を流れていた澇水は必然的に東へ移動することになり、おおよそ現在の皂河の流路に沿って北に流れ、渭水に注いだことがわかる。現在の豊水が流れる沙河の旧河道で発掘された沙河古橋の年代が概ね秦漢時代にあたることから、遅くとも漢代初期には豊水も西へ移動し、現在の沙河の旧河道に沿って渭水に注ぐようになったと考えられる<sup>[60]</sup>。さらに、澧水の下流が西へ移動したことで、澇水の下流は再び澧水に注ぐことはなくなり、豊水との旧合流点だった場所より下流では、豊水の旧河道に沿って北へ流れるようになった。現在の蘇村以北一帯には当時は阿房宮建築群があったと考えられるので、澇水が現在の三橋付近まで東北へ流れるようなことはあり得ず、蘇村付近で北に曲がり、現在の漆渠河の河道に沿って渭水に注ぎ込んだと見られる。

前章でも既に触れたが、『詩経』小雅、白華に、「灇池北流，浸彼稻田」とあることから、西周時代には灇池が既に存在していたと看取される。また、灇池の初出は『史記』秦始皇本紀で、「為吾浯灇池君」と記されたことから、灇池は遅くとも秦代には存在したとわかる。陳子怡は史料と地学の新知見を結び付け、昆明池一帯は「大（太）古の時代には、大きな浅い淡水湖だった」と見なし、灇池もこの湖に由来するものと考察した<sup>[61]</sup>。これは一つの説として提示しておく。

商周時代には、豊水は旧河道に沿って東へ流れていた。前章で検討した灇池はまさにこの旧河道にあることから、灇池とは周人が豊水の自然流路を改修して造ったもので、おそらくは堰を築いて水位を高くする方法で、灌漑に利するために行われたと考えられる。また、それと同時期に、周人が鎬京付近の澇水の自然流路か自然湖沼にも手を加えて灇池を造った可能性もある。なお、灇池がたとえ西周時代に既に造られていたとしても、その範囲は『水経注』に示されたほど広くはなく、北半分の「小昆明池」のみに限られる点には注意すべきで

ある。『水経注』に、「自漢武帝穿昆明池于是地，（鎬京）基構淪穢，今無可究。」とあるように、現在の斗門鎮から北豊鎬村にかけての一带は西周時代の鎬京の中心地で、その鎬京の大部分が昆明池に沈んだので、この地域の東南にある昆明池遺址区の北部と幹龍嶺の北にある古池跡（『水経注』の瀉池の南半分）も鎬京の一部とするのが妥当で、瀉池の水域であったとは考えがたい。

豊水の流路が変わった後、瀉池は直接の水源を失い、必然的にかなり縮小したが涸れるまでには至らず、次第に『水経注』に記されるような形になった。

秦が阿房宮を造営した際の「絡樊川以為池」とは、阿房宮の中に瀉水（樊川）の水を引いた貯水池があったということである。先に考察した塽水陂は阿房宮区に位置し、瀉水にも近く、おそらくここが阿房宮の池のあった場所であろう<sup>[62]</sup>。

秦代になると、この地域に取水用の水路が現れ始めた。『長安志』長安県に、「漆渠在県西二十里，旧自県之坎河分水，経県界二十里入漕河。『漢書』曰，「穿此渠通漆水，故曰漆渠。」『括地志』曰，「胡亥築阿房宮，開此渠而運南山之漆。」<sup>[63]</sup>とある。先行研究によれば、秦代の漆渠は2つあり、東にあるのは（以下、「東漆渠」）『水経注』の記す交水故渠と隋唐時代の永安渠の前身で、西にあるのは（以下、「西漆渠」）上流で交水を取り込み、現在の干河村一石匣口を経て北流し、下流は現在の漆渠河にあたるという<sup>[64]</sup>。方位と距離から考えて、このうちの東漆渠は『長安志』の記す「漆渠」であろう。漆渠の開削は阿房宮の造営のために行われたので、この水路は水を引くのに必ず阿房宮の近くを通るはずである。東漆渠は瀉水の自然流路から水を取り込み、北に流れて瀉水に入り、阿房宮の東側を通るため、瀉水の谷間と子午谷の南からもたらされる漆の運搬に便利であった。西漆渠の中流は瀉水の自然流路で、阿房宮の西側を通るが、下流は豊水の旧河道に沿い、東北へは流れなかった。これは、阿房宮の建設のために流路を変える必要があったからであろう。西漆渠の上流が取り込んだ交水は、前漢時代に昆明池を整備した際に開削されたもので（後述）、秦代における西漆渠の上流の流路は現在の金沙河の自然流路と『水経注』の記す豊水支流であった。かくして、豊水の谷間の漆を簡便に運搬できるようになったのである。

以上が漢代初期以前の豊水・瀉水・瀉水の間地域における河流・貯水池・水路の概観である。

漢の武帝は元光6年（前129）に漕渠を開削し、3年かけて完成させた<sup>[65]</sup>。漕渠は渭水を現在の咸陽市南釣魚台付近から取り込み<sup>[66]</sup>、東に流れて瀉水・瀉水を横断して長安城の南に至る。その漕渠が完成してから6年後にあたる元狩3年（前120）に、昆明池が造られた<sup>[67]</sup>。先に述べたことからわかるように、昆明池が開削される前からこの地域には貯水池や水路があり、既にある程度の水利システムの基礎を備えていた。このことは、昆明池の場

所の選定と水利システムの設計に重要な意義を持った。

西漆渠があったことで、豊水の一部の水流と瀉水の本流が現在の甘（干）河村付近で合流し、大量かつ安定した水量を確保できるようになった。また、そこから水を補給する瀉池の水域も拡大した。これらは全て、ここに昆明池を造営する利点であった。しかしながら、昆明池の水量を安定的に維持するためには、渇水期には大量の水源地の確保が、増水期には過量の水の流入制限が必要となる。既存の水路ではこれを実現することは難しく、交水の開削はまさしくこの問題を解決するために行われたものであった。交水は皇子陂から瀉水を引き、現在の香積寺でさらに瀉水を取り込み、西に流れてまた豊水支流を受け入れ、十分な水量を確保した。その後、石塙で二手に分流するが、石塙は池に入る水の安定的供給量を調達したうえで、余剰水を西の豊水に排出する。瀉水の自然流路を用いるのではなく、台地の上に新たに交水を開削したのは、瀉水が西漆渠と合流した後の地形があまりに低く、西の豊水に排水するのが難しかったからだと考えられる<sup>[68]</sup>。また、瀉水にある皇子陂の造営も交水の開削に伴う工事で、旧河道から北に溢れた瀉水の水を貯留するために造られたと見られる。このようにして、昆明池の水源地は安定的なコントロールが可能となったのである。

昆明池の範囲は既に『簡報』に明示されているので、ここでは割愛する。池の北半分がもともと周の鎬京の一部であったことは既に前文でも説明した。池の南半分は北半分より高かったため、昆明池は「因鎬之旧沢」ということから掘られてはいるが<sup>[69]</sup>、池の前身も規模はそれほど大きなものではなかったであろう。昆明池が完成すると、もともと南から北へそこを横断して流れていた西漆渠の該当区間も当然存在しなくなった。昆明池がこのように広大な面積を必要としたのは、水軍の練兵を十分に行うためだけでなく、皇帝の行楽と保養の需要とも関係があった<sup>[70]</sup>。

論理的に考えると、瀉水は漢長安城の建設初期に水を供給する役割を担ったが、増水期には城郭に被害を与えたり、渇水期には水が不足したりという問題が生じた可能性は高い。これも昆明池造営の理由の1つであろう。同様に、安定的な水供給を維持するためには、付属の調節施設も必要となった。秦の阿房宮の池はちょうど調節施設を建設するのに適した場所にあり、それを塙水陂として長安城に供給する水の調節に利用したのは、時間と労力の節約になったに違いない。そのため、昆明池水は必ず北流して東に曲がり、阿房宮前殿の基壇を迂回してから、塙水陂を通過して東北へ流れ長安に入ることになった。それと同時に、瀉水から流入する水が減少したことで、もともと瀉水から阿房宮の池に引いていた水路は塞がって廃止された。塙水陂は、東へ流れ出る水路を通じて長安城の南と城内の明渠に、北へ流れ出る水路を通じて城の西・北と藕池にそれぞれ水を供給した。

昆明池は西漆渠の旧河道を通じて、北流して瀉池に繋がる。昆明池の水利システムにおけ

る瀉池の役割は明らかではないが、その下流は漕渠に通じるので、おそらく漕渠に水を補給する役割を持っていたと考えられる。とすれば、瀉池も水を貯え、水量を調節する機能を備えていたはずである。旧瀉池は自然流路より幅がやや広いだけで、貯水量はそれほど多くなかったため、この頃、現在の幹龍嶺の北にあった窪地も取り込むことで貯水量を増やしたのである。むしろ、瀉池はもともと既に存在していたので、窪地に何か特別な効用があったというわけではなく、せいぜい昆明池の水域の一部と見なすことができるという程度である。

昆明池から西の豊水へ注ぐ流出水路も昆明池を造る際に開削されたもので、これが最も池に近くて利便性の高い流出水路である。その他の流出水路は別の水利施設との関わりが多く、一定の水量を維持する必要から勝手に排水できないので、豊水に注ぐこの水路こそが最も主要かつ簡明な放水路と見るべきである。この水路が昆明池の取水口から同方向の水流を取り込むのも、こうした理由によるものと考えられる。

また、昆明池が造られて間もない太初元年（前104）、漢の武帝は建章宮を造営した。『水経注』に記される沔水は建章宮に流れ込む水路で、この時に建章宮へ水を供給するために開削されたものであろう。その時間的距離が昆明池の造営と比較的近接し、水流も沔水から分岐しただけなので、全体のシステムに大きな変化をもたらしたわけではないが、長安城への水供給と似た役割を沔水が果たしたということも、ここで併せて述べておきたい。

以上が昆明池水利システムの最初期の状況である。むしろ、この中の水利施設の一部にはおそらく後世に後続工事が行われたり、補修措置が取られたりしたこともあったであろう。しかし、そのシステムを子細に見ると、流入水路や流出水路も、漕渠や長安城への水供給も、昆明池造営当時には既に不可欠だったと考えられる。ゆえに、上述のシステムは入念な計画を経て、ほぼ同時期に完成したものの集合体だったと理解できる。全般的に見て、全てのシステムは既存の貯水池と水路を徹底的に活用し、昆明池の様々な役割を十分に考慮して設計された、極めて緻密なものと言えよう。

河池陂およびそこに注ぎ込む2つの水路と下流にあたる2つの水路は、前漢中後期に開削された可能性が最も高い。河池陂水は交水北渠を水源とし、その流入水路の1つは「漢故渠」と言われるように漢代に造られ、もう1つの水路は秦の東漆渠の旧河道であった。しかし、そもそも昆明池を造営したときに、交水を開削して水を集めて昆明池に入れたというのに、もしまたこの豊水支流と瀉水も取り込む水路を開削して分流させるならば、明らかに矛盾しているように見える。そのうえ、水系から見れば、河池陂の主な機能は漕渠に水を供給することであったが、漕渠が使用された期間はそれほど長くはなく、開通してまもなく沈泥で塞がり、顕著な役割を果たすことはできなかった<sup>[71]</sup>。もし当時比較的澄んでいた河池陂水が漕渠に流れ込み、渭水から入る大量の泥砂が漕渠に堆積するスピードを減速させられて

いたとしたら、漕渠はかくも早く放棄されることはなかっただろうと想像できる。したがって、河池陂から漕渠に水を補給するための工事は後世の補修措置であった可能性が高い。以上から、河池陂の造営は昆明池より後に行われ、昆明池造営時には秦の東漆渠は一時廃止され、「漢故渠」は未開削だったことがわかる。

前漢中後期、渭河の第2段丘に位置する昆明池での大量の貯水は、第1段丘に位置する長安城の地下水の水位を上昇させ、しばしば地下での溢水災害を引き起こし、土壌の塩類集積が進んでいった<sup>[72]</sup>。当時、漕渠の沈泥は武帝期よりもさらにひどい状況だったに違いなく、これは漕渠の近くにあった太倉への食糧備蓄だけでなく、長安城の南への水供給にも影響を与えたであろう。もし、この時に昆明池の水利システムを再整備するならば、昆明池への流入水量を減らして、改めて昆明池の水源の水を漕渠に引く方法が、上述の2つの問題をまとめて解決する一挙両得の良策であったことは明らかである。河池陂とこれに関連する水路は、ちょうどこうした点を補填することができたのである。

水を集めて昆明池に注ぐ交水には、昆明池に流れ込む水量を調整する石堰があるが、池への流入水量が多すぎないようにするにはできるものの、一定量を減らすことはできなかった。ひとたび池に流れ込んだ一定量の水が必要な分を超えてしまうと、他の措置を取らなければならない。そこで、豊水支流が交水に注ぐ合流点に流出水路を開削し、豊水支流の水を北へ放水できるようにしたことで、昆明池への流入水量を減らすという目的を果たした。漢故渠の下流は東漆渠の旧河道を利用していたが、東漆渠は当時も改修が行われ、上流では澇水と接してその水流を取り込み、北へ排水できるようになった。交水の2つの水路は合流して河池陂に入るが、合流後に澇水へ注ぐ流路は余剰水を排出するために造られたと考えられる。河池陂水は東北に流れて漕渠に水を補給することができ、また、その西口から昆明池に注ぎ、池の水量を調節した。『水経注』に見える漕渠が「昆明故渠（実際は河池陂水）」を水源とする状態は、おおよそこの時期に形成された。このようにして、長安城の水源にもある程度の変化が起きた。昆明池水が減少すると、堰水陂を通して供給される水も減ったが、河池陂から漕渠に補給された水は長安城の南を通るので、同様に長安城へ供水できた。漢・平帝の元始元年（1）に辟雍が建てられたが<sup>[73]</sup>、『水経注』はこれに供給するために「昆明故渠」の水を引いたと述べている。つまり、この水路も水供給する機能を持っていた証左になる。さらに、交水の2つの水路の余剰水が澇水に排出されて澇水の流量を増加させたので、同様に長安城へ供給する水を補充することができた。豊水・澇水の余剰水と、皇子陂の水を取り込む澇水は、合流して北へ流れる。『水経注』は、『漢書』元后伝に記される曲陽侯王根の「壊決高都」の故事を引用し、この合流後の河川について、「高都水」とは合流点以降に付けられた新たな名前かもしれないと述べている。また、『漢書』元后伝に、「(成都侯王商) 後又穿長

安城、引内澧水注第中大陂以行船<sup>[74]</sup>とある、その「内澧水」という表記にはとりわけ注意が必要である。ここは、「内」を「納」に通じると見なして、王商が「引きて澧水を納む」と解釈することも、「内澧水」と見なして、澧水と関連はするが、それとは区別される河川の名前と読み取ることもできる。論理的に分析すると、王商が水を城内に引くならば、高都水と昆明池を無視して遠く離れた豊水に水を求めるはずはない。最も近くて利便性が高い水源が高都水であることは明らかである。もし豊水が豊水支流と交水の水路を通じて高都水の水源となるならば、高都水が豊水の名を用いても全く問題はない。高都水は単に「澧水」、あるいは豊水の本流と区別するために「内澧水」と称された可能性もある。このように、上述のどちらの解釈も可能である。したがって、これも前述の復原の証拠の1つとすることができる。

ただ、昆明池は水量が減少したために、前代ほど重要ではなくなったが、後漢時代もある程度の規模を維持しており、漢の安帝が視察に訪れたこともあった<sup>[75]</sup>。また、十六国時代の後秦の弘始17年（415）に起きた「昆明池水竭」を、史書は後秦衰亡の予兆である異常現象と記した<sup>[76]</sup>。これは、昆明池が次第に沈泥化の傾向を示すようになったと解釈できる一方で、魏晋期には昆明池はまだ機能を維持できていたとも考えられ、関中地域における重要な水系であることに変わりはない。昆明池が涸れて25年後、北魏の太武帝が改めて浚渫し、ほぼ旧観を回復した。『水経注』が示すのはその頃の様相である。

### III. 隋唐時代における昆明池水利システムの改修と衰退

隋代には大興城が造営され、新たに城を建設する需要から、城の西にある昆明池周辺の水利用システムの調整が行われるようになった。

開皇初年、永安渠が造られ、大興城に水を供給した<sup>[77]</sup>。先述のとおり、永安渠は『水経注』に見える交水の北の故渠（東漆渠）を基礎として造られた。その具体的な流路は既に考察したので、ここでは触れない。隋の文帝が皇子陂を永安陂と改名したことから<sup>[78]</sup>、永安渠がそれまでと同様にこの陂を通じて滴水から水を取り込んでいたとわかる。ただ、永安渠の建造と同時期に、それと繋がっていた「漢故渠」を浚渫したという記述は見られないので、漢故渠はこの時には既に廃止されていたのかもしれない。また、永安渠が主に大興城への水供給のために造られた以上、もともと西流して河池陂に入っていた水路も廃止されたはずである。そのため、河池陂の枯渇は避けられず、陂から東北へ流れ出て漕渠に水を補給するための水路と西へ流れ出る放水路も同時期に廃止された。漕渠に水を補給するための水路は大興城の西北角を横断して行くが、隋唐時代には既にこの水路に関する記述は何もなく、



建城の際に塞がれたと考えるのが妥当であろう。同様に、東北へ流れ出る昆明池水と堀水陂がその後も記録に登場しなくなったのは、漢の長安城が打ち捨てられて、こうした水供給の施設を引き続き維持する必要がなくなり、おそらくこの時点で全て廃止されたからだと考えられる。当時の昆明池には南側の取水口と西側・北側の放水口だけが残されていた。

開皇4年(584)には漕渠が開削された<sup>[79]</sup>。この漕渠は漢代の渠を基礎として造られており、その流路もほぼ一致している<sup>[80]</sup>。漕渠の完成後、瀉池から北へ流れ出た瀉水は、さらに北流して渭水には入らず、漕渠に遮られて、その水源の1つとなった。そのため、昆明池は当時漕渠へ水を補給する役割を担っていたわけである。この漕渠(永通渠)での漕運はおそらく隋末に廃止されたと見られるが<sup>[81]</sup>、瀉水が永通渠に流れ込み、渭水へは入らないという状況は、少なくとも唐の貞観年間(627-649)まで続いたことが『括地志』の記載からわかる<sup>[82]</sup>。

長安城が既に南へ移ったことで、昆明池の貯水が城に害を及ぼすことはなくなった。他方で、昆明池には水上戦の訓練の場という役割がまだ残されており<sup>[83]</sup>、その行楽地・保養地としての役割も次第に目立っていく。国力を增強させた隋唐王朝は、この池の維持を、ひいてはその規模の拡大をも企図したに違いない。遅くとも唐初には、「豊、鎬二水皆已堰入昆明池、無復流派<sup>[84]</sup>。」と記されるような状況だった。この記述には多少誇張の嫌いはあるが、当時は豊水と瀉水の水を大量に堰き止めて、昆明池に入れる措置を取っていたはずである。現在の香積寺付近で瀉水から大量の水を永安渠に引いていたので、この史料に見える瀉水とは、瀉水の余剰水を取り込む交水を指すのであろう。豊水と交水は堰き止められた後、漢代の旧河道に沿って昆明池へ大量に流れ込んだものと推定される。そして、さらに大量の豊水と交水を引き込むために、唐代に古くなった堰を改修し、石炭・賀蘭の2つの堰が造られた。この2つの堰に関する初出の史料は、唐・徳宗の貞元13年(797)の、「詔京兆尹韓皋修昆明池石炭・賀蘭兩堰兼湖渠」という記事である。ただ、この時の工事は改修という性質を持つため、2つの堰はそれよりも早くからあったと見るべきであろう。『括地志』には、「豊水渠今名賀蘭渠、東北流注交水<sup>[85]</sup>。」とあるが、この渠はすなわち『水経注』に見える豊水支流であり、唐代には豊水を堰き止めて昆明池に引く水路でもあった。賀蘭渠とは唐初に新しく付けられた名前で、賀蘭堰もそれと同時期に名付けられたものと思われる。以上から、賀蘭堰は唐初に豊水を堰き止めた際に命名されたことがわかり、石炭堰も同時期に名付けられたと考えられる。賀蘭堰は現在の灃峪口にあたり、豊水を堰き止めて交水へ流す。石炭堰は別名を石園堰と言い、現在の堰頭村にあり、交水を堰き止めて昆明池へ流す<sup>[86]</sup>。

唐代初期には、『括地志』が、「彪池、今按其池周五十五步<sup>[87]</sup>。」と記すように、瀉池水は涸れつつあった。長年の泥の堆積で、この頃には既に瀉池水は豊水の旧河道に貯留することが

難しくなり、澗池も広い水域を保てなくなっていた。「池周十五歩」の澗池は、おそらく澗池水を補充する泉の水が溜まった、当初の小さな澗に過ぎなくなっていたと考えられる。

唐・中宗の神龍年間（705-707）に、安樂公主は定昆池を改修した<sup>[88]</sup>。定昆池は現在の長安区河池寨・長里村付近にあり、河池陂をもとに整備拡大して造られたものと考えられる<sup>[89]</sup>。この池は永安渠の水を引き、池の水は西に流れて昆明池へ注ぎ込んだ<sup>[90]</sup>。これは、旧河池陂の流入水路と流出水路とを活用したものであろう。そのため、定昆池の改修後には、昆明池は再び永安渠の水を取り込むようになった。

唐・玄宗の天宝3載（744）に、再び漕渠が浚渫された<sup>[91]</sup>。少なくとも貞元年間（785-805）まで澗池は存在していたが<sup>[92]</sup>、それは、当時もなお昆明池から北へ流れ出ていく水が漕渠と通じていたために、再び水源を補給することができたからである。改修された漕渠は、代宗の大暦年間（766-779）以降、「漸不通舟」という状態になり<sup>[93]</sup>、沈泥の堆積が次第に進んでいた。前述のとおり、昆明池改修の関連工事は貞元年間に行われたが、それ以前に昆明池にも水流が滞るという問題が生じていたことが看取できる。唐・文宗の大和年間（827-835）に改めて漕渠が開通した際も<sup>[94]</sup>、その後ほどなくして昆明池が再び浚渫されている<sup>[95]</sup>。漕渠の閉塞と浚渫は、昆明池のそれと時期的にはほぼ重なり、前述した水の補給関係と繋がりがあつたものと考えられる。

宋敏求が『長安志』に、「（昆明池）今為民田」と記したことから<sup>[96]</sup>、昆明池は北宋後期には既に涸れていたことがわかる。しかし、宋敏求より少し後の時代の程大昌は、この記事に見える「今」が指すのは、「唐世作『図経』時」と指摘した<sup>[97]</sup>。とすれば、昆明池の枯渇は唐末まで遡ることができるが、「車駕幸昆明池<sup>[98]</sup>」の記事がある唐・武宗の会昌元年（841）より早まることはない。要するに、昆明池が唐末五代に枯渇したという通説は正しかった、ということになる。また、昆明池が涸れたからには、その水を取り込んでいた澗池とその北にあった澗水も同時期に枯渇したはずである。

ただ、『長安志』は定昆池について記してはいるものの、その枯渇について触れていないが、『長安志』とほぼ同時期に成立した張礼の『遊城南記』には、「西望三会寺，定昆池」と明言され<sup>[99]</sup>、定昆池が宋代も存在していたことが裏付けられる。したがって、定昆池の流入水路と流出水路は少なく見積もっても宋代まではまだ残っており、昆明池が涸れた影響を受けなかったことがわかる。『簡報』によれば、昆明池の豊水へ通じる流出水路の沈泥が、「昆明池を貫き万村西部の流入水路の沈泥と繋がっていたので、昆明池が廃止されてからしばらくの間は上述の2つの水路の間に1本の河川が形成されていたと推測できる」という。これは、昆明池が廃止された後もなお、定昆池の放水口から水が西流し、旧昆明池の西側にあった放水口を通じて豊水へ流れ込んでいた痕跡であることは間違いない。以上から、昆明

池は定昆池から流れ込む水だけでは維持することができず、南側から流れてくる交水を主要な水源としていたが、それが枯渇してしまったのは、石闔堰を廃止したために、交水を堰き止めて北流させ、池へ導くことができなくなったからだと推測できる。

昆明池が涸れた後、交水の南側の賀蘭渠はまだ存在していた。ただ、その水を堰き止めて池へ導くという役割がなくなったに過ぎず、賀蘭渠の流入水量は減少したものの、灌漑に転用されて清代の三官渠の前身となった。

滌池は昆明池の水を取り込まないので、昆明池が枯渇した後も残ったが、その規模はやはり徐々に縮小していった。『長安志』には、「聖女泉。出県西二十里昆明池北平地上。周十歩。西北流五十歩、与牧猪泉合。……按『十道志』、「長安西有滌池、亦名聖女泉。」蓋滌池水相近也<sup>[100]</sup>。」とあり、『三輔黄図』・『太平寰宇記』などにも滌池の別名は聖女泉と記載されている。『長安志』に至っては聖女泉を正式な名称としており<sup>[101]</sup>、唐宋期には既に「滌池」が池としての形状を保てなくなり、次第に「聖女泉」の名に取って代わられたと考えられる。宋代にはこの泉の面積は唐代よりもさらに小さくなり、枯渇傾向が見られる。泉の水が次第に涸れて滌池の名が用いられなくなったからこそ、清代の王森文は自身が目にした西山寺泉を聖女泉や滌池に付会したのであろう。

## おわりに

以上の考察を通して、漢唐間の昆明池の水利システムの概要をさらに明確に示すことができた。

昆明池の実態とは、先秦時代からこの地域に存在していた水域を継承したものであった。漢の武帝が開削したとき、昆明池は東は現在の万村、西は現在の斗門鎮、南は現在の石匣口、北は現在の南豊鎬村に至り、「周回四十里<sup>[102]</sup>」、「地三百三十二頃<sup>[103]</sup>」となった。前漢後期以降、池の面積は少し縮小し、一度は枯渇したこともあったが、北魏時代にやや旧観を回復した。唐代に昆明池は改修されたが、その範囲はおおよそ漢代の池の沿岸線を踏襲していた<sup>[104]</sup>。しかし、唐末五代には昆明池は早々に涸れて農地となった。

昆明池に付属する貯水池には、瀉池・滌池・河池陂（定昆池）・塢水陂・皇子陂（永安陂）がある<sup>[105]</sup>。瀉池は先秦時代から見られる瀉水の人工貯水池であり、昆明池が開削されてから面積が拡大したが、昆明池の下流にあたるため、昆明池とともに衰退した。滌池は西周から見られる豊水の人工貯水池であり、豊水の水路が改修されてから大幅に縮小したものの存続はしており、その水流は昆明池から北へ流れ出た瀉水と繋がっていたが、唐代以降次第に枯渇した。河池陂は前漢後期に開削され、昆明池に入る水量を減少させ、漕渠に水を補充す

る機能を備えていたが、隋代に廃止された。しかし、唐代中葉に河池陂の旧跡を利用して定昆池が開削され、主に行楽と保養のための場として用いられて宋代まで続いた。堀水陂は漢の武帝期に秦の阿房宮の池を利用して造られた。主に長安城に供給される水量の調整を担い、おそらく隋代に廃止されたと見られる。皇子陂も前漢に造られた。滹水を引いて交水へ流すための付帯施設で、隋代に永安陂と改名され、宋代まで続いた。

昆明池は南山からの滹水・澇水・豊水の3つの河川を水源とするが、その主な取水口は一貫して池の南にあった。すなわち、堰頭村から交水と分かれて北流し、石匣口に至って昆明池に流れ込む水路である。秦代には既に漆渠が昆明池の前身にあたる池沼と繋がっていた。漢の武帝期に交水を開削して滹水・澇水・豊水の3つの河川をまとめ、西漆渠（堰頭村—石匣口間の水路）を利用して昆明池に水源を提供した。前漢後期に河池陂が開削されて、河池陂の流出水路が昆明池の第2の取水口となったが、河池陂の水も滹水・澇水を水源としており、昆明池は新たな水源を増やせぬままであった。そのうえ、交水の北に開削された2つの水路から河池陂に入った水は、北流して漕渠へ補給され、かえって昆明池への流入水量は減少した。隋代には永安渠が造られて河池陂が枯渇したため、昆明池の水源はいよいよ心許なくなりましたが、唐初にまた、豊水・澇水の大量の水が堰頭村—石匣口間の水路に沿って昆明池に入るようになった。さらに、唐代中葉には、永安渠の一部の水が定昆池を通して再び昆明池に注ぐようになった。しかし、唐末に石闔堰が廃止されると、堰頭村—石匣口間の水路も涸れ、昆明池は定昆池のみから取水するようになったが、ここからの水量だけでは昆明池を維持し続ける力はなく、池の水は次第に涸れていった。唐末以降、堰頭村—石匣口間の水路は涸れてしまったが、この水路へ水を集めるために開削された交水は豊富な水源を持ち、永安渠へ供給するなどの役割をもち続けていたので、廃止されることなく現在に至るまで流れ続けてきた。交水の南にあった、もともと豊水を引いて交水に導いた水路も、灌漑に便利であったため、現在もなお使われている。

昆明池の東北・北・西には各々1本の流出水路がある。北の水路とは澇水のこと、秦の西漆渠を継承した、自然流路を改造してできたものである。この水路は漕渠を横断したので、漕渠を通るたびに水は必ず漕渠に流れ込んだが、さもないと、たちまち北に流れて渭水に注いだ。唐末に昆明池が涸れた後は、この水路には安定した水源がなかったが、まだ水を流すことはできた。現在は漆渠河と呼ばれている。西の水路は主要な放水路で、豊水に注ぐ。前漢に昆明池が造られた際に開削され、唐末に昆明池が荒廃した後も定昆池の水を取り込み、まだ水が流れていた。東北の水路も前漢に開削され、主として長安城へ水を供給する役割を果たしていたが、隋代になって堀水陂と同時期に廃止された。

『水経注』の河川水系に関する記述の正確さは、総合的に見て唐代以前の典籍の中では唯

一無二のものと言え、唐代以前の河川水系の復原には他の追随を許さない重要な役割を持っている。秦漢から隋唐期の河川水系の変遷を復原するには、『水経注』の示す河川水系資料が、書かれた時代の前後をも見渡せる中心的な資料となる。これは断代史的な地方行政区画の研究が、1つの中心的な資料をもとに復原を行うのと類似している<sup>[106]</sup>。『水経注』のテキストを精読し、考古資料と対照することで、北魏時代の昆明池に関連する河川水系の精密な復原を行うことができ、またこれを踏まえて、前漢ないしは先秦まで遡り、隋唐まで下れば、全面的かつ精度の高い昆明池水利システムの復原ができ、その変化の様相を推考することも可能になる。本稿はこの理念に基づく1つの試みである。

## 注

- [1] 昆明池に関する専論、あるいは専節を設けて昆明池について検討した論著には、主に以下のようなものがある。陳子怡「由昆明池而遡及鎬京及豊邑」『西京訪古叢稿』西京籌備委員会、1935年。黄盛璋「西安城市发展中的給水問題以及今後水源の利用与開発」『地理学報』1958年第4期。胡謙盈「豊鎬地区諸水道的踏察——兼論周都豊鎬位置」『考古』1963年第4期。胡謙盈「漢昆明池及其有關遺存踏察記」『考古与文物』1980年第1期。郭声波「隋唐長安水利設施的地理復原研究」『暨南史学』第3輯、暨南大学出版社、2004年。李令福『関中水利開發与環境』人民出版社、2004年。中国社会科学院考古研究所漢長安城考古隊「西安市漢唐昆明池遺址の鉆探与試掘簡報」『考古』2006年第10期。楊金輝「浅論長安昆明池的開挖緣由」『西安文理学院学報（社会科学版）』2007年第3期。楊金輝「長安昆明池的興廢變遷与功能演变」『貴州師範大学学報（社会科学版）』2007年第5期。李令福「論漢代昆明池的功能与影響」『唐都學刊』2008年第1期。李令福「漢昆明池的興修及其对長安城郊環境的影響」『陝西師範大学学報（哲学社会科学版）』2008年第4期。王作良「漢唐長安昆明池的功用及其文化与文学影響」『長安大学学報（社会科学版）』2010年第3期。張寧・張旭「漢昆明池的興廢与功能考辨」『文博』2013年第3期。この他にも昆明池を取り上げた研究は多いが、ここでは個別に取り上げない。
- [2] 嘉慶『長安県志』には既に『水経注水道考』の一文が採録され、『水経注』に関連する水路を詳しく考察している（〔清〕張聰賢修・〔清〕董曾臣纂『長安県志』卷14、山川志下、成文出版社、1973年、403-410頁）。現代の黄盛璋・李令福は関連する問題を研究する際、共に『水経注』に依拠して昆明池水系の復原を進めている。黄盛璋「西安城市发展中的給水問題以及今後水源の利用与開發」『地理学報』1958年第4期。黄盛璋「『水経注』選釈・渭水」侯仁之主編『中国古代地理名著選読』科学出版社、1959年。李令福『関中水利開發与環境』人民出版社、2004年、130-150頁。
- [3] 3つの河川にはどれも別称がある。文章の都合上、本稿では原則として『水経注』に従い、豊水・瀉水・沔水を用いるが、もし必要がある場合は、その他の呼称も使用する（例えば、『水経注』の時代より前は、「沔水」ではなく「瀉水」を用いた）。後文で触れる瀉（鄜・鎬）池や瀨（彪）池の場合も同様であることをここに言及しておく。
- [4] 本文に抄録した『水経注』の文章は、いずれも〔北魏〕酈道元注、楊守敬・熊会貞疏、段熙仲点校、陳橋駅復校『水経注疏』卷19、渭水下、江蘇古籍出版社、1989年から引用した。
- [5] 言うまでもなく、表中に列挙する諸学者が検討した2つの池はいずれも漢代の状況であるが、彼らも『水経注』の資料を多く用いている。そのうえ、たとえ2つの池が時代によってその面積に差異があったとしても、基本的な位置に変わりはない。ゆえに、ここでは『水経注』の時代の

- 2つの池について考察するが、ここに列举した諸学者の説を先行研究と見なす。
- [6] [清] 王森文「漢唐都城図後記」中国科学院考古研究所編『唐長安大明宮』科学出版社、1959年に参考資料として採録、61頁。[清] 張聰賢修・[清] 董曾臣等撰『長安県志』巻14、山川、成文出版社影印民国25年重印本、1973年、405頁。この『長安県志』の地理古跡の部分は、実は王森文によるものであるため（黄盛璋「西安城市发展中的給水問題以及今後水源的利用与開発」『地理学報』1958年第4期）、ここでは『長安県志』の文章を王氏の見解とする。
- [7] 陳子怡「由昆明池而遡及鎬京及豊邑」『西京訪古叢稿』西京籌備委員会、1935年。
- [8] 黄盛璋『『水経注』選釈・渭水』侯仁之主編『中国古代地理名著選読』科学出版社、1959年、115-116頁。
- [9] 胡謙盈「豊鎬地区諸水道の踏察——兼論周都豊鎬位置」『考古』1963年第4期。
- [10] 陳直『三輔黄図校証』陝西人民出版社、1980年、97・104頁。
- [11] 徐錫台「論周都鎬京的位置」『陝西師範大学学報（哲学社会科学版）』1982年第3期。徐は文中で滌池の所在地を検討してはいないが、添付の地図には滌池を蘇村の北に描いている。
- [12] 盧連成「西周豊鎬両京考」『中国歴史地理論叢』1988年第3期。
- [13] 中国社会科学院考古研究所漢長安城工作隊「西安市漢唐昆明池遺址的鉆探与試掘簡報」『考古』2006年第10期。
- [14] 何清谷撰『三輔黄図校釈』巻4、池沼の「瀉池」に『廟記』を引用する。この『廟記』とは、南朝梁の呉均の作で、詳しくは、黄崇浩「呉均生平与著述考索」『文献』1998年第4期を参照されたい。
- [15] 池の水が窪地を満たしていたか否かはこの池の外周にそれほど大きな影響はなく、『廟記』の記述と対応することには変わりはない。
- [16] 胡謙盈「豊鎬地区諸水道の踏察——兼論周都豊鎬位置」『考古』1963年第4期。杜甫亭「西安付近渭河河道の演變」『史前研究』1985年第1期。盧連成「西周豊鎬両京考」『中国歴史地理論叢』1988年第3期。
- [17] 盧連成「西周豊鎬両京考」『中国歴史地理論叢』1988年第3期。
- [18] [宋] 宋敏求撰、辛德勇・郎潔点校『長安志』巻12、長安県、三秦出版社、2013年、391頁。
- [19] ここでは雁鶩陂について「承昆明池下流」と述べられており、滌池とは状況が異なるが、滌池水と瀉水は連結しているので一応は筋が通る。これは『水経注』の「滌池在瀉池西」という記述とも決して矛盾しない。
- [20] [清] 王森文「漢唐都城図後記」中国科学院考古研究所編『唐長安大明宮』科学出版社、1959年に参考資料として採録、61頁。
- [21] [清] 張聰賢修・[清] 董曾臣等撰『長安県志』巻14、山川、成文出版社影印民国25年重印本、1973年、405頁。この『長安県志』の地理古跡の部分は、実は王森文によるものであるため（黄盛璋「西安城市发展中的給水問題以及今後水源的利用与開発」『地理学報』1958年第4期）、ここでは『長安県志』の文章を王氏の見解とする。
- [22] [唐] 李吉甫撰、賀次君点校『元和郡県図志』巻1、13頁。
- [23] 俞偉超「漢長安城西北部勘査記」『考古通訊』1956年第5期。
- [24] 現在の西安武警学院内にある高台遺址が磁石門と伝えられるが（この説を支持するものに、国家文物局主編『中国文物地図集・陝西分冊』下冊、西安地圖出版社、1998年、49頁などがある）、この説は地理的位置が合わないばかりか、近年の考古資料からも支持されておらず（中国社会科学院考古研究所・西安市文物保護研究所阿房宮考古隊「西安市上林苑遺址六号建築的勘査与試掘」『考古』2007年第11期）、明らかに採用できない。
- [25] 中国社会科学院考古研究所・西安市文物保護研究所阿房宮考古隊「西安市上林苑遺址三号建築

- 及五号建築排水管道遺跡的発掘』『考古』2007年第3期。
- [26] 黄盛璋「西安城市发展中的給水問題以及今後水源の利用与開発」『地理学報』1958年第4期。
- [27] 西安市文物局文物処・西安市文物保護考古所「秦阿房宮遺址考古調査報告」『文博』1998年第1期。中国社会科学院考古研究所・西安市文物保護研究所阿房宮考古隊「上林苑四号建築遺址的勘探和発掘」『考古学報』2007年第3期。
- [28] 西安市文物局文物処・西安市文物保護考古所「秦阿房宮遺址考古調査報告」『文博』1998年第1期。
- [29] 中国社会科学院考古研究所漢長安城考古隊「西安市漢唐昆明池遺址的鉆探与試掘簡報」『考古』2006年第10期。
- [30] 史念海主編『西安歷史地図集』西安地圖出版社, 1996年, 56頁の「西漢建章宮図」。
- [31] 黄盛璋「西安城市发展中的給水問題以及今後水源の利用与開發」『地理学報』1958年第4期。
- [32] 『簡報』は、池の北岸の2つの放水口を「或いは『水経注』渭水に記載される「昆明故渠」か」と述べているが、地理的位置によると、この流出水路はおそらく上述の「昆明池水」の水源というだけで、本条の「昆明故渠」ではあり得ない。
- [33] 黄盛璋「『水経注』選釈・渭水」侯仁之主編『中国古代地理名著選讀』1959年, 117頁。呂卓民「高陽原的地望与相關問題」『中国歴史地理論叢』1993年第1期。
- [34] [宋] 樂史撰, 王文楚等点校『太平寰宇記』卷25, 中華書局, 2007年, 531頁。
- [35] [宋] 宋敏求撰, 辛德勇・郎潔点校『長安志』391頁。
- [36] 清代の趙一清が最初にこの3件の記事を『豊水』篇の佚文と見なし(『水経注釈』), 陳橋馱もこの説を採るが(『水経注』佚文)『水経注』地名匯編)附録), 妥当である。
- [37] [宋] 宋敏求撰, 辛德勇・郎潔点校『長安志』卷3, 宮室, 161頁。
- [38] [宋] 宋敏求撰, 辛德勇・郎潔点校『長安志』卷11, 万年県, 365頁。
- [39] [宋] 宋敏求撰, 辛德勇・郎潔点校『長安志』卷12, 長安県, 385-386頁。
- [40] [宋] 宋敏求撰, 辛德勇・郎潔点校『長安志』卷12, 長安県, 387-388頁。
- [41] [宋] 宋敏求撰, 辛德勇・郎潔点校『長安志』卷12, 長安県, 390-391頁。
- [42] 辛玉璞「御宿川考」『中国歴史地理論叢』1997年第1期。
- [43] 胡謙盈「豊鎬地区諸水道の踏察——兼論周都豊鎬位置」『考古』1963年第4期。楊思植・杜甫亭「西安地区河流及水系的歴史演變」『陝西師範大学学報(哲学社会科学版)』1985年第3期。盧連成「西周豊鎬兩京考」『中国歴史地理論叢』1988年第3期。
- [44] 史念海「環繞長安の河流及有関の渠道」『中国歴史地理論叢』1996年第1期。
- [45] 趙双楨「長安瀉河初議」長安県水利志編纂組編『長安県水利志』陝西師範大学出版社, 1996年, 323頁。
- [46] 長安県水利志編纂組編『長安県水利志』73頁。
- [47] 呂卓民「高陽原的地望与相關問題」『中国歴史地理論叢』1993年第1期。
- [48] 黄盛璋「西安城市发展中的給水問題以及今後水源の利用与開發」『地理学報』1958年第4期。郭声波「隋唐長安水利設施的地理復原研究」『暨南史学』第3輯, 暨南大学出版社, 2004年。
- [49] 郭声波「隋唐長安水利設施的地理復原研究」『暨南史学』第3輯。
- [50] [清] 王森文「漢唐都城図後記」中国科学院考古研究所編『唐長安大明宮』科学出版社, 1959年に参考資料として採録, 60-62頁。黄盛璋「西安城市发展中的給水問題以及今後水源の利用与開發」『地理学報』1958年第4期。呂卓民と李令福はこの見解に反対し, 石闌堰は香積寺付近でなければならぬと論じた(呂卓民「西安城南交涵二水の歴史變遷」『中国歴史地理論叢』1990年第2期。李令福「漢昆明池の興修及其对長安城郊環境的影響」『陝西師範大学学報(哲学社会科学版)』2008年第4期)。しかし, 両氏はまだ確たる証拠を挙げていない。殊に, もし彼らの

- 説に依拠するならば、豊水支流が交水に入らず、交水の北にある2本の故渠も由無く出現することになるため、明らかに採用できない。
- [51] 中国社会科学院考古研究所漢長安城工作隊「西安市漢唐昆明池遺址的鉆探与試掘簡報」『考古』2006年第10期。
- [52] 『魏書』卷4下、世祖紀下、中華書局、1974年、93頁。
- [53] 楊金輝「長安昆明池的興廢變遷与功能演變」『貴州師範大學學報（社会科学版）』2007年第5期参照。
- [54] 西安市文物局文物處・西安市文物保護考古所「秦阿房宮遺址考古調查報告」『文博』1998年第1期。中国社会科学院考古研究所・西安市文物保護研究所阿房宮考古隊「上林苑四号建築遺址的勘探和發掘」『考古學報』2007年第3期。
- [55] 盧連成「西周豐鎬兩京考」『中国歴史地理論叢』1988年第3期。また、楊思植と杜甫亭は、商周時代の澧水旧河道は、現在の漢長安城遺址の西側から「渭河と平行に東へ流れ、現在の灊河と渭河が合流する手前で渭河に注ぐ」と考えたが（楊思植・杜甫亭「西安地区河流及水系的歷史演變」『陝西師範大學學報（哲学社会科学版）』1985年第3期）、これも一つの説とされている。
- [56] 『史記』卷117、司馬相如列伝、中華書局、1959年、3017頁。
- [57] 呂卓民「西安城南交澇二水的歷史變遷」『中国歴史地理論叢』1990年第2期。呂は澇水が澧水に入る証明をしていないが、前掲の盧連成による商周時代の澧水旧河道の復原を踏まえて、地形と照合すると、澇水は北流して澧水に注ぐほかなかったことが理解できる。
- [58] 中国社会科学院考古研究所・西安市文物保護考古研究院阿房宮与上林苑考古隊「西安漢唐昆明池水系的考古勘探与試掘（2012-2016）」『中国文物報』2017年3月24日第8版。
- [59] 盧連成「西周豐鎬兩京考」『中国歴史地理論叢』1988年第3期。
- [60] 盧連成「西周豐鎬兩京考」『中国歴史地理論叢』1988年第3期。陝西師範大學地理系編『西安市地理志』陝西人民出版社、1988年、144頁。
- [61] 陳子怡「由昆明池而遡及鎬京及豐邑」『西京訪古叢稿』西京籌備委員會、1935年、4頁。
- [62] 李令福『関中水利開發与環境』64-65頁。
- [63] [宋] 宋敏求撰、辛德勇・郎潔点校『長安志』卷12、長安景、389-390頁。ここに引用されている『漢書』の文章は、現行本の『漢書』には見えない。
- [64] 辛玉璞「長安城南『史記』・『漢書』未載的人工渠」『中国歴史地理論叢』1998年第4期。
- [65] 『漢書』卷6、武帝紀、中華書局、1962年、165頁。
- [66] 史念海「中国的運河」『史念海全集』第1卷、人民出版社、2013年、333頁。
- [67] 『漢書』卷6、武帝紀、177頁。何清谷撰『三輔黃圖校釈』卷4、池沼、249頁。また、『漢書』食貨志に、元鼎2年（前115）頃に昆明池を大改修したという記述があるが（1170頁）、時間的に元狩3年と近接していることから、同様に初めて昆明池を建造した際の記録と見なすことができる。
- [68] 呂卓民と李令福には認識にかなり隔たりはあるが（例えば、石塢の所在地）、両者ともこの問題を指摘している。呂卓民「西安城南交澇二水的歷史變遷」『中国歴史地理論叢』1990年第2期、李令福「漢昆明池的興修及其對長安城郊環境的影響」『陝西師範大學學報（哲学社会科学版）』2008年第4期参照。
- [69] 『旧唐書』卷82、許敬宗伝、中華書局、1975年、2763頁。
- [70] 昆明池の用途については、既に多くの先行研究がある。李令福は、その用途を水軍の訓練・長安への水供給・漕運の統制・庭園の遊覧・水産物の養殖・天象の模倣の6つに要約したが（李令福「論漢代昆明池的功能与影響」『唐都學刊』2008年第1期）、ほぼ完璧な総括と言えよう。本稿では基本的に李氏の見解に賛同しているため、昆明池の用途については文意に従って補足的に



述べるに留め、特に論じない。

- [71] 辛徳勇「西漢時期陝西航運之地理研究」同氏著『旧史與地文録』中華書局、2013年、223頁。
- [72] 呂卓民「西安城南交澗二水の歴史変遷」『中国歴史地理論叢』1990年第2期。
- [73] 『漢書』卷69上、王莽伝上、4069頁。
- [74] 『漢書』卷68、元后伝、4025頁。
- [75] 『後漢書』卷5、孝安帝紀、中華書局、1965年、240頁。
- [76] 『魏書』卷35、崔浩伝、809頁。
- [77] [宋] 樂史撰、王文楚等点校『太平寰宇記』卷25、雍州・長安県、中華書局、2007年、532頁。  
[宋] 宋敏求撰、辛徳勇・郎潔点校『長安志』卷12、長安県、390頁。永安渠が開削されたのは、『寰宇記』によると開皇2年、『長安志』によると開皇3年で、どちらが正しいかという判断はできないが、ここでは開皇初年に建設されたとの解釈で差し支えあるまい。
- [78] [宋] 宋敏求撰、辛徳勇・郎潔点校『長安志』卷11、長安県、367頁。
- [79] 『隋書』卷1、高祖紀上、中華書局、1973年、21頁。
- [80] 馬正林「渭河水運和關中漕渠」『陝西師範大学学報（哲学社会科学版）』1983年第4期。彼が復原した漕渠の流路には誤りがあるものの、この点への指摘は極めて正確で、後発の研究者にはその説を採る者も多いが、ここでは詳述しない。
- [81] 馬正林「渭河水運和關中漕渠」『陝西師範大学学報（哲学社会科学版）』1983年第4期。
- [82] [唐] 李泰等著、賀次君輯校『括地志輯校』中華書局、1980年、10頁。
- [83] 『新唐書』高祖紀に、「(武徳9年・626)三月庚寅、幸昆明池、習水戰。」と記されている(中華書局、1975年、19頁)。
- [84] [唐] 李泰等著、賀次君輯校『括地志輯校』11頁。『括地志輯校』は「巳」字を「已」字に誤る。本条の出典元である『玉海』([宋] 王應麟纂『玉海』卷171、宮室・池沼、江蘇古籍出版社・上海書店、1990年、3142頁)の原文と『玉海』よりも早く成立した程大昌の『雍録』に抄録された『括地志』の文([宋] 程大昌撰、黄永年点校『雍録』卷6、昆明池、中華書局、2002年、129頁)に基づき、直接修正した。
- [85] [唐] 李泰等著、賀次君輯校『括地志輯校』11頁。
- [86] 石闔堰の初出は宋代の宋敏求『長安志』で、「石闔堰。在県西南三十二里。『水経注』曰、「交水西至石塢、漢武帝元狩三年穿昆明池所造。」と書かれている([宋] 宋敏求撰、辛徳勇・郎潔点校『長安志』390-391頁)。「炭」と「闔」は音が近く、この堰は「石炭堰」のことであろう。ただし、唐代以前には「石炭」・「石闔」の名称はなかったと考えられ、『水経注』にもただ「石塢」とだけ記されるため、本稿ではこのように判断した。
- [87] [唐] 李泰等著、賀次君輯校『括地志輯校』11頁。
- [88] [唐] 杜佑撰、王文錦等点校『通典』卷173、州郡3、中華書局、1988年、4509頁。
- [89] 呂卓民「高陽原的地望与相関問題」『中国歴史地理論叢』1993年第1期。
- [90] 郭声波「隋唐長安水利設施的地理復原研究」『暨南史学』第3輯、暨南大学出版社、2004年。
- [91] 『新唐書』卷37、地理志1、964頁。
- [92] 『通典』州郡典、京兆府長安県に、「武王理鑄、今昆明池北鑄陂是也。」と記されている([唐] 杜佑撰、王文錦等点校『通典』卷173、州郡3、4509頁)。
- [93] [唐] 李吉甫『元和郡県図志』卷2、華州・華陰県、中華書局、1983年、35頁。
- [94] 『新唐書』卷53、食貨志3、1371頁。
- [95] 『旧唐書』卷17下、文宗紀下、561頁。
- [96] [宋] 宋敏求撰、辛徳勇・郎潔点校『長安志』卷11、長安県、391頁。
- [97] [宋] 程大昌撰、黄永年点校『雍録』卷6、昆明池、中華書局、2002年、168頁。

- [98] 『旧唐書』卷18上, 武宗上, 586頁。
- [99] [宋] 張礼撰, 史念海・曹爾琴校注『遊城南記校注』三秦出版社, 2006年, 167頁。
- [100] [宋] 宋敏求撰, 辛德勇・郎潔点校『長安志』389頁。
- [101] 『長安志』にも「潏池水」条はあるが, その文章には旧説を踏襲したものが多く, 同時代資料ではないため, 「聖女泉」条とは異なる。
- [102] 『漢書』卷6, 武帝紀, 「發謫吏穿昆明池」の臣瓚注, 177頁。
- [103] 何清谷撰『三輔黄圖校釈』卷4, 池沼, 中華書局, 2005年, 252頁。
- [104] 中国社会科学院考古研究所漢長安城考古隊「西安市漢唐昆明池遺址的鉆探与試掘簡報」『考古』2006年第10期。
- [105] 沅水下流の両側には他に倉池・藕池・太液池などもある。昆明池の水を取り込みはするが, これらの池と昆明池水利システムの中心部分との関係は比較的疎遠であるため, ここでは省略した。また, 雁鶩陂は潏池のことを指すのか否か判断を保留しているため, これも除外した。
- [106] 例えば, 周振鶴『西漢政区地理』人民出版社, 1987年は『漢書』地理志を, 李曉傑『東漢政区地理』山東教育出版社, 1999年は『続漢書』郡国志を中心的な資料として, それぞれこれに基づき当該時代の地方行政区画の復原研究を進めている。

(コウ ガクチョウ 復旦大学中国歴史地理研究所講師)  
(よしだ あい 学習院大学東洋文化研究所リサーチアシスタント)